命
それは、人が生きるための力そのものであり、
かけがえのないものです。
今回の特集では、一人でも多くの
命を救うことに全力を注ぐ、
消防隊員、救助隊員、
救命救急医にインタビュー。
日々生死と向き合う彼らの言葉を通して、
命の大切さをいま一度考えます。

［特集］

命をつなぐために

詳細　「消防・救助」 消防局総務課☎215-2010
「救命」 市立札幌病院総務課☎726-2211

消防

中央水槽隊
臼井（うすい）裕隆（ひろたか） 副隊長

火を使うときは慎重に。その気持ちを今より ほんの少し強く持ってほしい

火災出動を示す音声が鳴り響くと、直ちに消防車に乗り込み現場に急行。人命救助と消火活動を行う――それが消防隊員だ。

臼井さんは4人でチームを組む水槽隊の一員。最優先の任務は人命救助だ。防火服をまとい、水を噴射しながら燃え盛る建物に突入する。「炎の中は本当に過酷」。肌が焦げるような熱気。声も掛け合えないほどの轟音（ごう）。数センチ先の視界もないほどの煙…。建物の構造も分からない中、手探りで逃げ遅れた人を捜索する。

臼井さんが、命の尊さをより強く実感したのは、消防隊員になって間もないころにアパートで起きた火災。火元近くで幼い子ども2人と、その母親が倒れていた。“早く救出しなければ！”仲間の隊員が子どもたちを、臼井さんが母親をすぐさま抱きかかえ救急車に運び込んだが、2日後に息を引き取った。「あの時のことは今も忘れられない。つらい経験だったが、だからこそ、火災現場に残された人を一刻も早く救出して、普通の生活を取り戻してもらうことが私の使命だと、さらに強く思うようになった」。

人の命をいとも簡単に奪っていく火災。その原因は、料理中の不注意や寝たばこなど、日常生活のちょっとした気の緩みにある。「火を使うときは慎重に――その気持ちを今よりほんの少しだけ強く持ってほしい。それが、自らの命だけでなく、大切な人や周りの人の命を守ることにもなりますから」。これ以上、命を失わせたくない。そう願いながら、臼井さんは今日も消防車に乗り込む。

▲ 燃え盛る炎を前に、懸命な消火活動を行う消防隊

INFORMATION

地域の安全を支える消防団員を募集しています

「自分たちのまちは自分たちで守る」という考えに基づき、地域で防災活動を行う消防団員を募集しています。普段は会社や学校に通いながら、消防活動の訓練や住宅の防火指導、応急手当ての指導などに当たり、災害時には消防隊員と共に消火、救助活動を行います。地域における防災の要として、今後も活躍が期待されています。

[対象] 18歳以上の方
[申込] 各区の消防署へご連絡ください

DATA

平成22年
市内の火災件数 640件

最も多い出火原因は放火で、約4分の1を占める。次いでこんろ、たばこ、ストーブと続く。死者は22人、負傷者は135人出ている。

救助

中央特別高度救助隊
佐々木 成人（ささき なるひと） 隊長

危機に直面したとき、あきらめずに待っていてほしい。必ず救い出してみせるから

災害や事故が起きたときに、現場の最前線で人の命を救う救助隊。その中でも、厳しい研修課程を経て選抜されるのが「特別高度救助隊」だ。佐々木さんはその隊の隊長として9人の部下を率いている。

過酷な救助の現場では「ロープ一本に命を預けることもある」という。数年前の冬、高校生がスキーの途中でコース外に滑落し、崖の中腹で動けなくなる事故があった。雪崩が起きる危険がある中、佐々木さんら救助隊は、命綱を携えて慎重に近づき、7時間掛けて高校生を救い出した。

職務中は常に緊張感が付きまとう。取材中にも出動要請があり、現場に急行する一幕があった。幸い、火災感知器の誤作動であったが、出動時の表情は鬼気迫るものがあった。

助けを求める人がいれば、そこに向かうのが救助隊の役割だ。3月中旬には東日本大震災で津波の被害を受けた宮城県へ赴き、生存者を捜索した。「辺り一面がれきの山。燃料や魚の死骸の臭いが入り混じっていた。戦争は経験していないが、戦場の跡とはこういうものかもしれないと感じた」と佐々木さん。生存者の救助には至らなかったが、札幌でも今以上の準備をすべき、という気持ちを持ったという。「同規模の災害は札幌でも起こり得る。万が一、皆さんが危機に遭遇したときには、決してあきらめずに、近くの人と手を取り合って救助を待ってほしい。生きてさえいてくれれば、絶対に救い出してみせるから」。佐々木さんのその言葉に迷いはない。

東日本大震災の被災現場。がれきの山を乗り越え、救助活動を行う ▶

INFORMATION

災害時に地域で支え合う仕組みをつくりませんか

災害時に、障がいのある方や高齢者などの「移動に支援が必要な人」と「支援できる人」をあらかじめ把握して組み合わせ、一緒に避難する仕組みを整えている地域が増えています。また、町内会などで「防災マップ」を作成し、危険箇所の情報を住民同士で共有している地域もあります。突然の災害に備え、皆さんも地域の支援体制や避難場所などを確認してみてはいかがでしょうか。

［詳 細］保健福祉局総務課 ✆211-2932
防災マップについては危機管理対策課 ✆211-3062

DATA

平成22年 **市内での救助出動回数 1,094回**

出動人員の総数は、延べ32,036人。火災や交通事故のほか、山での遭難、水難、崖崩れなど、出動内容は多岐にわたる。

救命

市立札幌病院　救命救急センター

牧瀬（まきせ）博（ひろし）　部長

一刻を争う患者の命を守るのは 我々のチームワークと 皆さんの心掛けです

救急車やヘリコプターで次々と運び込まれる患者を、365日、24時間体制で受け入れる救命救急センター。牧瀬さんは息つく暇もないその現場の救命医だ。

搬送される患者は年間千人以上。心筋梗塞や脳卒中などで倒れ、生死の境をさまよう重篤な患者ばかりだ。「救命医療に欠かせないのは、医師をはじめ、看護師や臨床検査技師らとのチームワーク」と牧瀬さん。急病人の搬送と同時に、意識、呼吸、生命反応、年齢、性別、体格…分かる限りの情報をチームで共有。最善の方針を決め、治療に取り掛かる。

救命救急センターでは、より多くの命を救うため、心臓手術に利用する「人工心肺」を応用して用いている。人工心肺は一時的に心臓と肺の役割を果たす機器だが、改良を加え、短時間で脳に血液を送れるようにしたのだ。「命を守ると同時に、障がいなどの後遺症を防ぎ、社会に復帰する可能性も高められる」。患者にとってのベストを追求した一つの成果だ。

命を守り、社会復帰の可能性を高めるには、治療開始までの時間を短くすることが望ましい。そこで牧瀬さんが問題視しているのは、救急車を安易に利用する人が後を絶たないこと。市内では31台の救急車が年間約7万5千回出動するが、擦り傷や風邪での要請もあり、その間、本当に必要な人が利用できないこともある。「救急車はタクシーではなく、一刻を争う患者のためのもの――そう心掛けていただくだけで、救われる命があります」。救命の最後の砦（とりで）として、今日も牧瀬さんは命と向き合う。

緊急搬送された患者の処置室。刻々と変化する患者の容体を確認し合いながら迅速に治療を行う▶

INFORMATION

命を守る技術を学ぶ講習を行っています

急病人が出たときの正しい行動や、救急車が来るまでの応急処置を学ぶことができる講習を毎月実施しています。心臓マッサージや人工呼吸の方法、AEDの使用法などを、実技を交えて身に付けることができます。5月に実施する講習については本誌26ページに掲載。いざというとき、身近にいる人の命を守る力になります。

［詳 細］防災協会 ☎861-1211

DATA

平成21年　市内の心肺停止者の1カ月後生存率　**24.5%**

全国の平均は11.4%。このほか、心肺停止者の1カ月後社会復帰率は札幌市15.2%、全国平均7.1%となっている。